石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第517号　令和8年11月1日発行

第73回日本伝統工芸展金沢展



日本工芸会会長賞　村上浩堂《象嵌花器「暮れ色の運河」》



日本工芸会奨励賞　中田博士《モモタマナ》
－「第73回日本伝統工芸展金沢展 」より－

- 前田斉泰 －《来殿》と《冨有園》－【前田育徳会尊経閣文庫分館】
- 石川県の文化財【古美術】
- 特別展示 県工の工芸・デザイン
  －石川県立工業高等学校創立140周年記念－【近現代工芸】
- 特別展示 没後40年 高光一也【近現代絵画】
- 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 展覧会回顧　輪島塗－漆文化を後世に－
- ミュージアムレポート　0才からのファミリー鑑賞会
- 11月の行事予定
- 学芸室こぼれ話

各種団体展（第7～9展示室）

第73回日本伝統工芸展金沢展

主催／石川県教育委員会・日本放送協会金沢放送局・朝日新聞社・北國新聞社・公益財団法人 日本工芸会
後援／富山県教育委員会・福井県教育委員会　特別協力／日本通運株式会社

10月30日（金）～11月8日（日）会期中無休※初日は開会式後（10時頃）の入場となります（最終日は17時終了）

我が国には、世界に卓絶する工芸の伝統があります。伝統は、生きて流れているもので、永遠にかわらない本質を持ちながら、一瞬もとどまることのないのが本来の姿であります。

伝統工芸は、単に古いものを模倣し、従来の技法を墨守することではありません。伝統こそ工芸の基礎になるもので、これをしっかりと把握し、父祖から受け継いだ優れた技術を一層錬磨するとともに、今日の生活に即した新しいものを築き上げることが、我々に課せられた責務であると信じます。

昭和25年（1950）、文化財保護法が施行され、歴史上、若しくは芸術上特に価値の高い工芸技術を、国として保護育成することになりました。その趣旨にそって、昭和29年（1954）以来、陶芸、染織、漆芸、金工、木竹工、人形、諸工芸の7部門にわたり、日本伝統工芸展が開催されてきました。

金沢への巡回展は昭和38年（1963）の第10回展から始まり、以降は毎年開催されています。全入選作品539点の内から、重要無形文化財保持者（人間国宝）や受賞者らの秀作に加え、地元北陸の作家を中心とした入選作品を併せた299点を展示します。

本年は石川県から全国最多の63名が入選し、日本工芸会会長賞《象嵌花器「暮れ色の運河」》村上浩堂（金工）、日本工芸会奨励賞《モモタマナ》中田博士（陶芸）が入賞しました。名工のわざが織り成す、多様な美の共演をご堪能ください。

【観覧料】一般1，000円（900円）　65歳以上900円
大学生600円（500円）　高校生以下無料

＊（　）内は20名以上の団体
＊身体障がい者・精神障がい者保健福祉・療育手帳をお持ちの方、またはミライロIDをご提示の方および付き添いの方1名は観覧無料

■記念講演会

11月1日（日）13時30分～15時
演　題：「日本伝統工芸展は未来をつくることができるか」
講　師：十四代今泉今右衛門（重要無形文化財「色絵磁器」保持者）
　　松原伸生（無形文化財「長板中形」保持者）
聞き手：吉田幸央（日本工芸会執行委員・石川支部幹事長）
会　場：美術館ホール（参加無料・申込不要）

※文中敬称略



日本工芸会総裁賞　大木淑恵《花籃「濤声」》



高松宮記念賞
須藤靖典《会津消粉蒔絵漆箱「谷渡りの風」》



文部科学大臣賞
宮入映《浮織生絹着物「樹雨」》

◆展示作品解説

日時	11時～	13時～
10月31日（土）	《染　織》坂口　裕章	《漆　芸》寺西　松太
11月1日（日）	《染　織》山下　郁子	第73回展記念講演会
11月2日（月）	《漆　芸》大角　裕二	《金　工》宮薗　士朗
11月3日（火・祝）	《陶　芸》中田　一於	《染　織》毎田　仁嗣
11月4日（水）	《金　工》般若　泰樹	《木竹工》中嶋　武仁
11月5日（木）	《陶　芸》吉田　幸央	《人　形》高田　和司 《諸工芸》長岡　達雄
11月6日（金）	《金　工》村上　浩堂	《木竹工》角間　泰憲
11月7日（土）	《木竹工》松井　裕志	《漆　芸》林　　暁
11月8日（日）	《陶　芸》中田　博士	国立工芸館主任研究員　唐澤　昌宏

古美術（第2展示室）

石川県の文化財

10月30日（金）～12月7日（月）　会期中無休

毎年11月1日から7日までの1週間は、国の定める「文化財保護強調週間」です。当館では例年この期間にあわせて、県内の文化財を紹介する展示をおこなっています。

文化財は、過去の人々の暮らしや美意識、信仰や技術を今に伝えてくれます。それぞれの文化財には、長い年月を経て受け継がれてきた物語があります。当館では、こうした文化財にふれることで、地域の歩みや文化の豊かさを感じていただけるよう、毎年さまざまな作品を展示しています。

今回は、加賀国一宮として知られる白山比咩神社から国宝《剣 銘吉光》、また加賀国二宮の菅生石部神社から重要文化財《正親町天皇宸翰御詠草》を展示します。また曹洞宗の古刹大乗寺からは、開山徹通義介、二世瑩山紹瑾、そして三世明峰素哲にわたる嗣法を示す貴重な文書である重要文化財《三代嗣法書》を展示し、あわせて開山、二世、三世の頂相（肖像画）や払子をご覧いただきます。その他、鎌倉時代に制作され、当時の大寺院の僧の傲慢な心を天狗になぞらえ批判的に描いた、加賀前田家伝来の重要文化財《天狗草紙（園城寺巻）》や、大聖寺生まれで、加賀藩御用絵師をつとめた佐々木泉景（1773～1848）が描いた加賀市指定文化財《群鹿図屏風》（実性院蔵）などを公開します。



加賀市指定文化財《群鹿図屏風》右隻 実性院蔵

前田育徳会尊経閣文庫分館

前田斉泰 －《来殿》と《冨有園》－

10月30日（金）～12月7日（月）　会期中無休

能と狂言をあわせた「能楽」という言葉が、実は明治時代につくられた言葉だということはあまり知られていません。能と狂言の歴史は古く、ながく猿楽、散楽と呼ばれていました。これを「今定めて日はく『能楽』と云う」と述べたのが、十三代加賀藩主であった前田斉泰です。明治14年（1881）に建てられた芝能楽堂の能舞台（現在は靖国神社内にあり）には、斉泰による「能楽」の額が掲げられています。

斉泰は、《来殿》と《冨有園》というふたつの能を創作しました。《来殿》は嘉永5年（1852）、前田家が家祖とする菅原道真の950年忌にあわせてつくられました。道真をシテとした能はいくつかありますが、いずれも「菅公御憤怒の事」を主題とすることから、「祭事の砌は風雅な舞曲をも奏したき志にて」と、能《雷電》の後半を、天皇から「大冨天神」という神号を賜ったことに感謝して舞う内容に改めたのです。

明治に入り、江戸に移った斉泰が住まいしたのが、根岸邸です。斉泰の孫にあたる利嗣は前田家当主として再び本郷に暮らす一方、斉泰は根岸邸を愛し、明治8年（1875）には能舞台がつくられました。その舞台開きに披露されたのが《冨有園》です。「春は花、夏涼し、秋はもみじに冬は雪」に始まり、四季折々の美しさを詠み、雨風の支障もないことは「三社の神恵」であると謡います。

本特集では、このふたつの能を中心に、斉泰の免状など、斉泰と能の関わりを紹介します。



《根岸邸庭園図》

近現代工芸（第5展示室）

特別展示 県工の工芸・デザイン

−石川県立工業高等学校創立140周年記念−

10月30日（金）〜12月7日（月）　会期中無休

本年、石川県立工業高等学校は創立１４０周年を迎えます。同校は、明治20年（１８８７）に「金沢区工業学校」として開校し、その後、幾度かの改称を経て現在に至る、わが国でも最も歴史ある公立工業高等学校の一つです。初代校長を務めた納富介次郎のもと、工業技術と美術・工芸を結びつけた教育を展開し、地域の産業や文化を支える人材を育んできました。

本展では、同校附属の「ギャラリー雪章」に収蔵される工芸作品を中心に、開校初期から昭和時代にかけて教鞭を執った教員や卒業生、そしてその後、重要無形文化財保持者（人間国宝）や日本芸術院会員として活躍した作家たちの作品を通して、石川県立工業高等学校の歩みを紹介します。蓮田修吾郎、大樋年朗、武腰敏昭といった日本芸術院をはじめ、松田権六、大場松魚、寺井直次、前史雄、木村雨山など、人間国宝となった作家も輩出しています。

また、開校草創期には、本県の工芸振興を目的として、国内の優れた工芸作品や新しい技術・デザインを備えた作品、さらには西洋のデザインや工芸を研究するための資料が収集されました。こうした教育と研究の蓄積は、今日の石川の豊かな工芸文化へとつながっています。

本展を通して、作品に込められた技術や創意だけでなく、１４０年にわたり工芸を学び、教え、未来へ伝えてきた「県工」の歴史とその精神を感じていただければ幸いです。



板谷波山《柘榴模様花瓶》 石川県立工業高等学校蔵

近現代絵画（第4展示室）

特別展示 没後40年 高光一也

10月30日（金）〜12月7日（月）　会期中無休

石川の美術界の第一線で活躍した画家・高光一也（明治40〜昭和61年／１９０７〜１９８６）の代名詞ともいえるのが、瑞々しい生気と健康美に満ちた女性像です。印象派、ゴッホの絵画に惹かれた若き高光は、石川県立工業学校の図案絵画科へ入学しました。卒業後も制作を続け、中村研一に師事し骨太の写実表現を習得します。その後官展を中心に受賞を重ねて画壇で注目されると、同郷の宮本三郎、南政善らとともに、従軍画家として戦争記録画の制作にもあたります。終戦後は写実家としての腕をふるいながら、世界的な流行をみせた抽象表現への取り組み、生き生きとした新しい裸体表現、色彩の追求など、数々の試行錯誤のなか女性美の世界を描き続けました。開放的で軽やかな色彩に満ちた円熟期の作品は、高光が目指した生きる喜びを説くような「明るく、健康な絵」を具現しています。

その制作活動の拠点としたのは、故郷の地でした。「要は頭の中が中央であればいいのだ」と石川から県内外の洋画壇を牽引し、晩年は日本芸術院会員および文化功労者に選出されました。また地元の美術教育と後進育成にも携わり、当館の設立と運営をはじめとした石川の美術振興にも多大な功績を残しています。

本展示では高光の没後40年を記念し、いまなお「淡い美しさのなかの強さ」を語りかける、華麗な色彩表現へと辿りついた画業を振り返ります。



高光一也《馬に凭る（B）》

近現代絵画・彫刻（第3・6展示室）

優品選

10月30日（金）～12月7日（月）　会期中無休

日本画分野では季節の優品とともに、石川県立工業高等学校ゆかりの日本画家たちの作品を展示します。近代京都画壇の重要人物である久保田米僊は、明治30年（1897）から2年間、石川県立工業学校の図案絵画科で教鞭を執りました。米僊筆《馬山斥候図（うまのやませっこうず）》を紹介するほか、米僊の後任として赴任した山田敬中の作品もご覧いただきます。

油彩画分野からは、第4展示室で開催の特別展示「没後40年 高光一也」の展示にあわせて高光一也の弟子であった円地信二《友》を紹介します。縦長の画面に2人の女性が描かれています。1人は憂いを含んだ表情で横たわり、もう1人は見守るように膝を抱えて座っています。円地の作品ではこれまで見られなかった俯瞰的な構図で表現されています。また、「県工の純粋美術」と題して小特集をします。

素描分野からも、昭和17年（1942）にタイ・ビルマで描いた高光一也の従軍スケッチをご紹介します。スケッチの対象は人物、風俗や風景と多岐にわたり、特徴を的確につかみ、描きこみすぎることを避け、軽妙に描かれています。

彫刻分野からは米林勝二《木陰の女》をご紹介します。寄りかかるように身を捻る裸婦像は、女性の量感と動きが確かに捉えられています。米林は朝倉文夫に学び、人物像や仏像を多く制作し、日展や現代美術展などで活躍しました。石川を中心とした各地には米林の手掛けた野外彫刻が多くあります。本作とあわせて、街の彫刻と見比べてみるのもよいでしょう。



円地信二《友》

展覧会回顧

輪島塗 ―漆文化を後世に―

6月27日（土）～8月2日（日）

輪島塗は昭和52年（1977）、国の重要無形文化財に指定された漆芸技術です。まず第1章では、輪島塗とは何かを紹介するため、輪島塗資料館に残る近代以前の作品から始まり、《輪島塗煮物椀技術工程見本》（国・文化庁保管）1式および、木地・黒塗・蒔絵と沈金の加飾済み《懸盤（かけばん）》計3式を石川県輪島漆芸美術館から借用しました。あわせて《輪島塗工程見本手板》（そごう美術館蔵）を触れる展示としたことで、来館者に工程がよく理解できたようです。

第2章第1部では、同技術保存会が技術伝承のために、制作した作品を展示しました。木地や下地を担当する技術者たちを顔写真とともに紹介し、沈金や蒔絵などの華やかな装飾は、目に見えない仕事が支えていることを強調しました。続く第2部で展示した、同会の一員で芸術院会員や人間国宝を始めとする作家たちの優品も、違った視点で見ることができたと思われます。

第3章では国内における漆芸の発信地の一つとして、石川県立輪島漆芸技術研修所を紹介しました。輪島市には漆芸に係るさまざまな事業に携わる人々が集まっており、作家育成にふさわしい土地です。この地で育まれた、活躍中の歴代卒業生の作品とともに、能登半島地震後の卒業制作を展示し、未来への希望を込めました。

展覧会を見た方々が、それぞれの考えで輪島の漆芸を応援していただければ、担当者としてうれしく思います。



第7展示室

第38回 二科会写真部石川支部展

11月12日(木)～11月16日(月)　会期中無休
※開場は17時30分まで

二科会写真部は伝統ある「二科会」の写真部門として設立して以来、写真による表現の可能性の追求、写真芸術に対する新しい価値の創造、さらに写真文化の発展と向上に寄与することを目的として活動を続けてまいりました。

二科会写真部石川支部展は、二科会写真部石川支部の支部員が1年間取り組んできた作品の発表の場です。本年度の展示は作家1名につき「自由作品」1枚と「テーマ秋」2枚、さらに「第73回二科会写真部展」の作品を展示します。写真は時代を記録する表現でありましたが、現代の写真は、技術と社会の変化に呼応し、ドキュメントからアート、自己表現まで幅広く展開しています。作品に込められたメッセージを感じ、感動の一枚に出会っていただければ幸いです。

◇入場無料
◇連絡先　二科会写真部石川支部支部長　森田武年
電話：080－3044－7499
panda-bomb@spacelan.ne.jp

第8・9展示室

第79回示現会金沢展

11月12日(木)～11月16日(月)　会期中無休

昭和22年（1947）、具象の飽くなき美の探求を目指す同志が集まり洋画の示現会を結成しました。

今年第79回を迎え、今春、国立新美術館で展示された作品と支部小作品を併せて80点余りを展示します。

尚、昨年に引継ぎ金沢展で小作品の公募をおこない、一般の方の力作も同時展示致します。

当会の目指すところの具象絵画の魅力をお伝えできればと思っています。

多くの方々にご高覧戴ければ幸いです。

※土曜、13時30分より作品解説を行います。

◇入場無料
◇主催　一般社団法人示現会、示現会石川県支部、北國新聞社
◇連絡先　示現会石川県支部長　吉塚春生
電話：090－4325－3732

第8・9展示室

第36回石川県水墨画協会公募展

11月27日(金)～11月30日(月)　会期中無休
※開場は16時30分まで

石川県水墨画協会公募展も今年度で36回目を迎えることとなりました。公募展は会員の研鑽成果発表の場であると同時に、広く県内の水墨画愛好者からも作品を募り、厳正な審査で選ばれた入選作を展示しております。

水墨画は基本的に墨と水だけを使って白い紙の上に筆を使って描かれます。その制限のなかで墨の濃淡やにじみ、かすれで奥行きや色彩などを感じさせる様々な作品をぜひご鑑賞いただき、墨と水の調和をお楽しみください。

皆様のご来場をお待ちしております。

◇入場無料
◇連絡先　石川県水墨画協会事務局長　横浜紀子
電話：0767－26－1456

第7・8・9展示室

いしかわ秋の芸術祭 文化絢爛（けんらん） 第83回北國写真展

11月19日(木)～11月23日(月・祝)　会期中無休
※開場は10時～17時

北陸最古の歴史と伝統を誇る「北國写真展」を開催します。北陸の写真愛好家が心を込めて撮影した作品を一堂に展示し、自然や暮らし、人々の営みなど、写真ならではの豊かな表現を紹介します。また、併催展として、北陸の祭りや行事を題材にした作品展、学生写真コンクール、U22フォトスクール成果発表展なども開催し、幅広い世代の写真の魅力を発信します。本展を通じて、県内外の皆さまに写真文化の奥深さと感動を届けます。

◇観覧料　500円
◇主催　いしかわ秋の芸術祭実行委員会、石川県、一般財団法人石川県芸術文化協会、北國写真連盟、北國新聞社、福井新聞社
◇後援　石川県カメラ商組合、北陸放送、テレビ金沢、金沢ケーブル、エフエム石川、ラジオかなざわ、ラジオこまつ、ラジオななお、ラジオたかおか（予定）
◇連絡先　北國写真連盟事務局（北國新聞社地域ビジネス部内）
〒920－8588 金沢市南町2－1
電話：076－260－3581

ミュージアムレポート

0才からのファミリー鑑賞会 2026

9月26日(土)、27日(日)開催

毎年恒例の「0才からのファミリー鑑賞会」は、赤ちゃんから小学生まで、美術館での作品鑑賞を家族で楽しむイベントです。平成28（2016）年度からNPO法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会・代表理事の冨田めぐみ氏を講師にお迎えして開催しています。今年度は2日間で計3回、1回につき5組20名程度の枠で募集をおこないましたが、受付開始からすぐに定員に達し、子どもとの美術鑑賞に関心のある保護者が多くいることを実感しました。初めて参加されるご家族が多く、生後4か月から小学5年生まで、幅広い年齢のお子さんにご参加いただきました。

今回は、特別展「蓮田修吾郎 ―世界を拓く窓」で鑑賞会を実施しました。展示を見る前に、冨田氏の呼びかけで、家族で体を使って蓮田作品になりきろう！と「なりきりポーズ」をみんなでとると、一気に場が和み一体感が生まれました。鑑賞の準備運動ができた後は展示室に出発。蓮田修吾郎の「金属造型」という作品世界を前に、子どもたちは見て感じたことや好きな作品を家族にお話し、先生やスタッフの手を引いて共有してくれていました。きらきらした楽しい空気の中、1時間の活動はあっという間に終了。子どもの新しい一面を知ったというご家族もいて、美術を通したコミュニケーションの魅力を知ることができました。

今後も年に1回程度開催予定です。ぜひ皆様のご参加をお待ちしております。





学芸室こぼれ話

「美術館周辺の自然」

中澤　菜見子（学芸第二課学芸主任）

いまの時期（この原稿を書いているのは9月）は、美術館の周りにたくさんのキノコが生えています。一日で大きくなるキノコ、無防備なキノコ、虫に食べられるキノコ、枯れたキノコ…

きききのこ きききのこ
ノコノコノコノコ あるいたり しない
きききのこ きききのこ
ノコノコ あるいたり しないけど
ぎんの あめあめ ふったらば
せいが のびてくるるるる るるるる
いきてる いきてる いきてる いきてる
きのこは いきてるんだね

童謡「きのこ」より引用（作詞：まどみちお　作曲：くらかけ昭二）

ぜひみなさんもご来館のついでにキノコを探してみてください。



11月の行事予定

■のびのび鑑賞デー

作品について感じたこと、思ったことをお話ししながらコレクション展を楽しめる日です。

＊ただし、通常の開館日のお客様同士の会話を制限するものではありません。
＊のびのび鑑賞デーのご利用に、特別な手続きは不要です。

11月8日（日）9時30分～18時
（展示室への入室は17時30分まで）
会場：2階コレクション展示室

■土曜講座

11月21日（土）「13代前田斉泰」
学芸専門員　村上尚子
11月28日（土）「高光一也とゆかりのある油彩画家たち」　学芸員　久田佳歩
13時30分～15時
会場：講義室
＊聴講無料、申込不要

■日本伝統工芸展金沢展の関連行事

＊各イベント情報は本誌2頁をご覧ください。

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.96

《フードの女Ⅰ》ふーどのおんな

縦145.5　横112.2(cm)
昭和47年(1972)　第4回改組日展

高光一也　たかみつかずや

明治40(1907)～昭和61(1986)

高光によれば「とどこおりなく気持ちよく仕上がった」一作で、自評のとおり色彩豊かでありながら、端麗な女性の姿と調和した気品あふれる女性像となっています。画歴のなかでも屈指の華麗な色彩を誇る、高光芸術を代表する秀作です。モデルの女性は小松出身で、眉は細く剃り、つけまつ毛と化粧を施し、パリ・サントノーレで購入した衣装を着用しています。衣装には大層こだわりがあり、高光は海外でも常に探して回ったそうですが、化粧を施した婦人を描くのはこれが初めてでした。描きこむのに悩んだという壁と床を区切る線がほどよく奥行のバランスを生み、画面を引き締めています。



昭和40年代に具象表現へと回帰した高光は、新境地を探るかのように、色彩を一旦手放します。一見すると単純なモノトーンともとれる、絵の具の独特の光沢とわずかな色彩を組み合わせた画調を展開しました。しかしその反動のように、輝くような色彩、鮮明な色調と対比によって、女性美を描き出していきます。ためらいなく画面に女性の魅力を引き出し、この作品を制作した前年には日本芸術院賞を得ました。

やがて晩年の円熟期には、海外の風景・風俗を取り入れた異国情緒に富む画風へと転換します。現代の美人画ともいうべき、絵の具のような複雑なマチエールの画面から普遍的な美を語りかけ女性美を礼賛する、「白の時代」へと向かっていきました。

この作品は第4展示室特別展示「没後40年 高光一也」(本誌4頁参照)にて展示します。ぜひご覧ください。

次回の展覧会

令和8年12月12日(土)
～1月24日(日)

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
前田家の茶道具	茶道美術名品展

第6展示室	第3・4展示室	第5展示室
近現代の書	優品選 【近現代絵画・彫刻】	めでたいかたち、 はなやかなもよう 【近現代工芸】

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　370円(290円)
大学生　290円(230円)
高校生以下　無料
※(　)内は団体料金
11月2日は第1月曜により
コレクション展観覧無料の日

開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後6:00

11月は無休で開館しています



石川県立美術館だより
第517号(毎月発行)
2026年11月1日発行

〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL https://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。